

第1章

ナショナリズムを生み出す構造、制度、亡霊

高木 佑輔

要約：

ナショナリズムは戦争や革命の記憶と結びつく。しかしながら、そうした激情がどこから来るのかを考えるのは簡単ではない。本稿では、ナショナリズム研究の古典『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』の枠組みを手掛かりにしつつ、フィリピン・ナショナリズムの起源とその展開について考えていく。『想像の共同体』において、ナショナリズムの起源は、出版語と植民地国家形成に見いだされる。19世紀、スペインの国力が落ちる中でフィリピン諸島は大英帝国中心の海洋秩序の中に組み込まれていった。その過程で、語学に対する需要が高まり、出版語としてのスペイン語を巧みに操る知識人が生まれ、そうした知識を享受する中間層も形成された。こうした知識人は、宗主国スペインと植民地フィリピンとの落差を否応もなく感じ、独立運動をけん引するようになった。このことを希代のナショナリスト、ホセ・リサールは比較の亡霊と名付けた。他方、植民地国家に出仕するフィリピン人が増加するのは米国植民地期であった。植民地国家で教育を受け、植民地国家の官僚となった人々は、このままでよいのかと自問するようになった。まるで亡霊のように取りついた疑問を抱えながら生きたナショナリストの肖像を描き出しながら、フィリピン・ナショナリズムの起源と展開について考察する。

キーワード：

ナショナリズム、フィリピン、想像の共同体、比較の亡霊、植民地国家、知識人、官僚、中間層

はじめに

ナショナリズムの古典『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』の冒頭において、著者ベネディクト・アンダーソンは、国際主義を謳い上げたはずの兄弟国家である中国、ヴェトナム、そしてカンボジアとの戦争のことを想起する（アンダーソン1997）。そのうえで、国のために命を落とした兵士たちを祀る無名戦士の墓の記憶へと読者をいざなう。ナショナリズムがこのように戦争や死に結び付くとすれば、それは死の

危険さえいとわぬ政治運動の火種のようにとらえられる。例えば、フィリピンの 500 ペソ紙幣には、フェルディナンド・マルコス政権に立ち向かい、空港で銃殺されたニノイ・アキノ上院議員の肖像とともに「死に値する祖国」という一文が添えられている。果たしてアンダーソンはナショナリズムの起源をどこに見出したのだろうか。

アンダーソンは、同書の第 3 章「国民意識の起源」という章の中で、ラテン語とも口語とも異なる出版語の重要性を指摘している。出版語の読者たちは、紙の印刷物を媒介として目に見えぬ「読者同胞」としての一体感を育むようになっていった。また、出版語は言語を複製可能とし、ナショナリズムに特徴的な「古さのイメージ」を保証することになったという。さらに、出版語の誕生により、口語の中に標準語と方言という階層性が生まれた。それでは出版言語がナショナリズムを創り出す十分条件であったのだろうか。アンダーソンの答えは否である。

アンダーソンが、第 4 章「クレオール先駆者たち」で詳述するように、出版語の共有だけではナショナリズムを説明できない。仮に出版語の共有がナショナリズムを生み出すとすれば、米国が英国から独立する必然性は見いだせない。また、ラテンアメリカ諸国は単一のナショナリズムに基づくラテンアメリカ共和国を築いてもおかしくないが、実際には 18 の別々の国家に分裂した。アンダーソンは独立の理由として、植民地国家の行政制度の設計に注目する。ラテンアメリカの住民の一部が植民地官僚に採用され、特定の行政単位の中で転勤を繰り返しながら、「巡礼」とも呼ぶべき職業経験を積む。単なる転勤ではなくわざわざ巡礼と呼ぶのは、こうした経験が植民地官僚となった住民に新しいアイデンティティとしてのナショナル・アイデンティティを醸成するためである。巡礼の過程で、自分の郷里を離れた官僚は、同じような経験を持つ同僚に出会う。それと同時に、数々の場面で、自分たちとは異なる宗主国出身の官僚に出会い、「かれら」と異なる「われわれ」意識を醸成することになる。

以上を踏まえると、想像の共同体としてのナショナル・コミュニティは、植民地の行政国家制度の整備と結びついてきたことがわかる。植民地国家は、植民地官僚として生きる人々に植民地支配の一部に組み込まれる意識と、それに対する違和感の両方からなる「二重意識」を醸成した (Mojares 2006, 528)。植民地官僚制がナショナリズムを醸成したというアンダーソンの議論は、自らの経験を反省する個人の存在を前提としているともいえるだろう。官僚機構の一部として与えられた業務を遂行するだけであれば、異なる言葉や出自の同僚と働くことに対する疑問を持つこともなく、いくら働いても宗主国の官僚機構に参画することのない境遇に疑問を持つこともないだろう。換言すれば、アンダーソンの議論の前提は、自己の行為を反省し、言語化する人々、いわゆる知識人の存在が前提となっていると考えられる。

本論で取り上げるフィリピンのナショナリスト、ホセ・リサールは、スペイン語の小説によってフィリピン・ナショナリズムに火をつけた希代の知識人である。二重意識を論じたモハレスは、そもそもアンダーソンによるホセ・リサールについての考察を参照

していた (Mojares 2006, 528; Anderson 1998, 2)。アンダーソンは、リサールが西欧への留学から帰国した後、目の前にある祖国の風景がすべて違って見えたという経験に注目する。リサール自身は、その経験を「比較の亡霊」との出会いと名付けた (Anderson 1998, 2)。宗主国の生活を経験することで、植民地は当然の現実ではなく異質な何かとして立ち現れてきた。経験を言語化しているだけでも十分に興味深い、ここで「亡霊」という表現を使っていることもまた示唆的である。ナショナリストの知識人が「亡霊」に取りつかれたとすれば、ナショナリズムが冒頭で掲げたような死に至る激情と結びつくことも不自然ではないだろう。

本稿では、フィリピンを事例にして、ナショナリズムを生み出す構造や制度と、その中で比較の亡霊に取りつかれるという知識人の存在について考えていく。1896年に始まるフィリピン革命は、宗主国スペインに対する武装蜂起であり、1899年には革命勢力が独自の憲法を起草、アジアで最初の共和国となるマロロス共和国の設立に至った。この運動の思想的指導者が、革命勃発の年にスペイン当局により処刑されたホセ・リサールである。1861年、首都マニラの南に位置するラグーナ州に生まれたリサールは、マニラで学問を修めた後、宗主国スペインへと渡る。スペイン、マドリードを皮切りにパリやベルリンなどの欧州各地を旅した。そしてスペインによるフィリピン支配に疑問を抱き、『ノリ・メ・タンヘレ (我に触れるな)』と『エル・フィリプステリスモ (破壊分子)』の二つの小説によりフィリピン革命に多大な影響を与えた (Schumacher 1991)。

フィリピン革命の事例で興味深いのは、植民地に生まれたリサールが小説を書くような知性と構想力を身に着けたことのみならず、それを受け止める読者層が存在していた点であろう。再びアンダーソンに戻れば、革命前夜には、フィリピン諸島において出版語としてのスペイン語が存在していたことになる¹。人々は、リサールの小説を読み、革命のために立ち上がった。実際、リサールがスペイン政庁によって処刑されたきっかけは、革命運動カティプーナンの関係を疑われたためである。フィリピン革命を考えることで、革命の理想を明示した知識人と、その構想を理解した読者層の出現の双方について考察を深めることができるといえる。

以下の本論の第1節では、革命につながる社会変動について、それをもたらした政治経済構造の変化について考察する。国家形成をめぐる議論では、特定の国家形成について、その国家の位置する地域の国際システムの特徴を考慮する必要が指摘されてきた (Tilly 1992)。第1節では、この議論を手掛かりとしつつ、19世紀の東アジア地域システムの変容がフィリピンの植民地国家の変容に至る前史を整理する。第2節では、具体的な植民地国家の変容として、教育の普及についてまとめる。第3節では、フィリピン革命の過程を再構成しつつ、近年の研究成果に依拠して、フィリピン革命に参加した知

¹ スペイン及び米国の植民地期、フィリピンについての一般的な呼称はフィリピン諸島であり、本稿でも基本的にそれに倣う。

識人の役割を再評価する。第4節では、フィリピン革命の最中に新たな宗主国となった米国による植民地統治期に考察対象時期を移す。近年の研究では、米国本国において連邦政府の役割を強化しようとした革新主義者の役割が再評価されており、フィリピンの植民地国家建設においても一定の制度化が見られたことに注目する。植民地国家の制度化が進む中で、国家の外から革命を志向したナショナリストたちが、国家の内側から変革を追求するナショナリストたちへの世代交代を考察する。最後に、以上の考察をまとめ、今後の課題を整理する。なお、本稿は『教養としての東南アジア史』に所収予定の章「ナショナリズム」を執筆するための準備作業の一環であることから、第5節では、今後の作業についても若干整理しておきたい。

第1節 「海の帝国」とフィリピン諸島の社会経済変動

1815年、それまで数世紀にわたってフィリピン植民地の最も重要な経済活動であったガレオン貿易が途絶えた。ガレオン貿易は、メキシコとフィリピン諸島間の貿易であり、東（ラテンアメリカ）からの銀、北（中国）からの絹、南（インドネシア）からの香辛料、そして西（インド）からの象牙や木綿との交換であった（Legarda 1999, 33）。実質上、マニラの経済活動のほとんどはこの中継貿易に依存しており、ガレオン貿易の終焉は、フィリピン諸島の経済運営に変革を迫る出来事であった。

結論から言えば、ガレオン貿易の終焉は、フィリピン諸島の経済が、スペイン帝国から離れ、大英帝国の秩序の中に組み込まれる契機となった。白石が「海の帝国」と呼ぶこの海洋秩序の下、シンガポールや上海をはじめとする東アジア各地が、蒸気船、海底ケーブルによる電信と近代的金融によって結ばれた（白石 2000）。

こうした地域秩序の変容は、フィリピン植民地の社会経済変動へとつながった。まず、ガレオン貿易の終了後、マニラ、スアル、イロイロ、セブやサンボアング各港が順次外国船にも開港された。マニラは首都であり、ガレオン貿易時代以来の中継港である。スアルはルソン島中部の一大穀倉地帯パンガシナン州の北部にあり、砂糖やコメを集積して中国等への輸出拠点となっていた。イロイロは糖業で名高いネグロス島の中心地であり、この時期にはセブ以上に重要な経済活動の拠点であった。さらに、ミンダナオ島の西端サンボアングもまた経済活動の重要拠点であった。この時期の主要輸出品は、砂糖、アバカ麻、葉タバコとコーヒーであったが、サンボアング近郊ではコーヒー栽培が盛んな地域でもある（Legarda 1999, 124-126）。こうした経済活動のほとんどは、英米系の金融資本と中国人の商業ネットワークによって発展した。以上の結果、宗主国スペインの影響力は大幅に後退し、フィリピンは「スペイン国旗をかかげたアングロ・チャイニーズの植民地」となったといわれる（Wickberg 2000, 72）。

ただし、ここでいう「チャイニーズ」の理解には注意が必要である。フィリピンにおける中国系住民についての古典的研究でウィックバーグが述べるように、経済変動の受

益者は外国人に留まるものではない。そのことは、スペインによるフィリピン統治が、経済的権益よりも布教を重視するカトリック教会に依存したことが大きく関係する。スペインによる植民地統治の特徴は、フィリピン諸島における中国人との混血であるメスティーソの位置づけに如実に表れる。英領マラヤや蘭領東インドでは、中国人との混血であるババやプラナカンが、特殊な中国人として扱われたが、スペイン領フィリピンでは、メスティーソは特殊なフィリピン人として認識されていたという（Wickberg 2000, 31）。その背景として、メスティーソがフィリピン社会において確固とした地位を築いたことがある。スペイン政庁は、1762年の大英帝国によるマニラ占領以降、中国人の新たな渡航が50年以上に渡って禁じた。その結果、それ以前に商業を担っていた中国人の活動の多くをメスティーソが担うようになっていった。

19世紀にフィリピン各地の港が開港していくと、新たに中国人がフィリピンに移住するようになった。この時期、経済活動の面で中国人とぶつかったのが中国系メスティーソであった。一見、「チャイニーズ」と一括りにできそうな中国人と中国系メスティーソであるが、自らカトリック教徒となり、西洋的な文化に慣れ親しんだ中国系メスティーソは、経済活動上の対抗関係にある中国人と自己認識を共有することは考えにくい。実際に、ルソン島中部のバタンガス州のコーヒー生産の産地では、中国人商人の立ち入りを禁止していたという（Wickberg 2000, 105）。また、19世紀末になると、スペイン政庁は人頭税を廃止し、所得に基づく課税に切り替えたが、そのことによってインディオとメスティーソの区分がなくなった（Wickberg 2000, 140-141）。こうした税制改革もまた、メスティーソをフィリピン人と一体化することに寄与したといえるだろう。

他方、19世紀末の技術革新はスペイン政庁の影響力の及ぶ範囲を拡大した。過去数世紀、スペイン政庁はフィリピン南部のミンダナオ島・スールー海域に十分な影響力を及ぼす事が出来ていなかった。スペインによる植民地化に先駆け、これらの地域には、スールー王国やマギンダナオ王国といったイスラームに基づく王国が存在していた。これらの王国は、スペインによる植民地化の後も、蘭領東インドを抑えたオランダや、英領マラヤを支配したイギリスなどとの駆け引きを通じてスペイン政庁と渡り合った。しかしながら、蒸気船の導入によりスペイン政庁側が軍事力において王国を圧倒するようになっていった。後に見るように、米国植民地統治下、ミンダナオ島はより一層マニラをはじめとするフィリピン北部や中部との結びつきを強めていくことになる。

第2節 教育の普及

元来、植民地政庁は住民教育に熱心とは言えなかったが、こうした傾向を変えたのが、19世紀の経済構造の変容であった（Abinales and Amoroso 2017, 93）。1863年の政庁令により、村レベルでの無償の基礎教育の義務化、スペイン語教師養成を目的とする男性師範学校の設置が決まった。1865年にはイエズス会による師範学校が開校した。1886年に

は、フィリピン全土で 2143 校の小学校があり、1890 年代には、マニラ以外にも中等学校が広まっていき、その中には 10 の女性向けの師範学校が含まれていたという。同じころ、保守的な運営で知られるドミニコ会のサントトマス大学において法律や医学といった非宗教系の科目が住民向けに開講された。

ガレオン貿易終了後の社会経済変動を研究した歴史家レガルダは、この時期のフィリピン社会には一定の中間層が存在したと論じる (Legarda 1999, 213)。こうした中間層は、一定の経済力を持ち、子供たちをマニラに送って教育を受けさせるようになった。また、スペイン本国の混乱とラテンアメリカ諸国の独立の結果、スペイン人が大量にフィリピンに流入し、フィリピン社会に西洋の文化が流入した。実際、1810 年にはおよそ 4000 人だったスペイン人人口が、1870 年には 1 万 3500 人に増加したという (Wickberg 2000, 129)。その結果、19 世紀にはスペインの政治的影響力の低下と文化的影響力の増大という「逆説的な展開」がみられたという (Wickberg 2000, 131)。こうした逆説的な展開の結果、フィリピン・ナショナリズムは、先スペイン時代のバサラ信仰などとは異なる東洋と西洋の文化の混ざり合う混交性を内包するようになっていった (Wickberg 2000, Ch. 5)。

教育とナショナリズムについては、リサーチをはじめとする啓蒙知識人 (イラストラード) についての研究を遺したシューマッカーの業績が示唆に富む (Schumacher 1991)。彼によれば、経済活動の活発化と教育機会の拡大の結果、フィリピン各地の富裕層がその子供をマニラに送るようになった。そのため、マニラの大学では、出身地や出自の異なる人々が机を並べるようになった。その結果、それまでは、フィリピン諸島生まれのスペイン人のみをさす呼称であった「フィリピン人」が、フィリピン諸島で生まれたすべての人を指すようになった。19 世紀の経済と社会の両面の変化の結果、フィリピン諸島出身者の全てを包含するものとして、フィリピン人意識が醸成されていったと考えられる。次節では、こうしたフィリピン人意識に基づく具体的な政治の展開について考えていくこととする。

第 3 節 フィリピン革命の中の知識人

フィリピン革命は、スペインからの独立を目指した武装蜂起に始まり、マロロス共和国樹立に至った 1896 年から 1899 年までと、米西戦争の結果、新しいフィリピンの宗主国となった米国とマロロス共和国との間で比米戦争が行われた 1899 年から 1902 年までの時期に分けることができる。2000 年代に入り、これまでの通説を覆す研究の蓄積が進んだ。これらの新しい研究では、いずれの時期においても知識人層の役割を見直すことの重要性を主張している。本節では、そうした研究成果に触れつつ、独立革命期のナショナリズムについて整理する。

リサーチの処刑後もおよそ 4 年にわたってフィリピン革命が続き、マロロス共和国建

国に至ったことが示すように、フィリピン革命はリサルが全体を指導したわけではない。リサルの刑死のきっかけとなったのは、カティプーナンと呼ばれる革命運動の蜂起であった。カティプーナンについて、『(貧しくて無知な) 大衆の反乱』という側面を強調した研究視角が重要とされてきた (Agoncillo 1996)。

こうした研究に対し、近年の歴史研究では、運動にかかわった人々の社会経済的背景についての詳細な調査が進んだ。例えば、スペイン軍事資料館において未使用であった資料を渉猟した研究において、カティプーナンの構成員の多くがホワイトカラーの職を持つ識字層であったことが解明された (Richardson 2013)。カティプーナンの最初の指導者アンドレス・ボニファシオは、マニラ市トンド地区の貧しい家に生まれたものの、様々な仕事の傍らスペイン語を学び、フランス革命やアメリカ大統領の歴史などについての知識を蓄えながら、リサルらのプロパガンダ運動についても熱心に勉強していた (Abinales and Amoroso 2017, 110)。

内紛の末、エミリオ・アギナルドがボニファシオからカティプーナンの指導者の地位を奪った。アギナルドの経歴は、植民地国家の形成とナショナリズム運動の関係性を考える上で重要であろう。アギナルドは、マニラの南になるカヴィテ州出身で、革命勃発まで植民地国家の下級官吏をしていた。アギナルドの指導によりフィリピン革命は継続し、米西戦争の過程でスペイン勢力はフィリピンから一掃された。1899年にマロロス共和国を設立すると、アギナルド自ら初代大統領となった。加えて、マロロス共和国の憲法は、太平洋の向こうキューバの憲法を模したものであったが、憲法制定に力を発揮したのが、19世紀の社会経済変動の受益者である知識人層であった (Majul 1996)。

しかしながら、マロロス共和国の独立が国際的に承認されることはなく、およそ3年超に及ぶ比米戦争を迎えることになる。比米戦争は、3年超続き、およそ2万人のフィリピン兵が戦死し、民間人の犠牲者はルソン島とヴィサヤ諸島を合わせて50万人、ミンダナオ地域では10万人に上った (Abinales and Amoroso 2017, 117)。この戦争の終結時の米国の宣言が反乱終結宣言であったことからわかるように、米国側は国家間の戦争と認めることはなかった。

こうした経緯から、比米戦争については、米国の帝国主義的な意図を強調する見方が支配的であるし、そのこと自体に間違いはないだろう。しかしながら、こうした見方は、米国の植民地統治がフィリピン人の積極登用を図るものであった事実を軽視することにもなりかねない。当時の米国政府は「明白なる天命」に基づく「恩恵的同化」政策が米国の植民地政策であるとしたが、これは事実の半分でしかない。同時期に米国によって植民地化されたプエルトリコとフィリピンにおける植民地政策を比較研究したジュリアン・ゴーの研究が示すように、米国が常に「恩恵的同化」政策を採用したわけではない (Go 2008)。むしろ、比米戦争に見られるようなフィリピン側の抵抗が、恩恵的同化を引き出したとみるほうが事実に近いのではないだろうか。19世紀のフィリピン・ナショナリズムは、圧倒的火力と植民地民主主義の導入という懐柔策の両方を使わない限り抑

え込むことはできなかったと考えられる。次節では、米国統治期のナショナリストの動向について検討を進める。

第4節 米国による植民地国家建設とナショナリストの変容

米国植民地下のフィリピン・ナショナリズムは、米国による植民地国家建設の枠内で展開されるようになった。米国植民地期初期に政党政治の中心にいたのは知識人を中心に設立された連邦党であった。この連邦党は、既に比米戦争中に設立されたことから、革命の裏切り者とみなされることもあった。ただし、連邦党は米国の作り物ではなく、少なくとも一部のフィリピン人の情勢判断を反映していた。かれらは、1900年の米国における大統領選挙において民主党が敗北したことを知り、長期的な政治闘争の必要性を認識したうえで連邦党を結成した（Cullinane 2003, 63）。さらに重要なのは、1907年に植民地議会選挙が開催される際には、米国からの即時独立を求める国民党が結成され、一時は米国への併合まで提案した連邦党を押しつけて議会多数派となり、それ以降およそ40年にわたって植民地議会の多数派を占めることとなった（Abinales and Amoroso 2017, Ch. 6）。

以下の表1に見るように、植民地議会の議員の大半が法律家であった。このことは、植民地議会が単なる富裕層ではなく、特定の教育を受けた人々によって運営されたことを意味する。

表1. 植民地議会議員の職歴の割合（％）

	1898	1907	1921		1932	
			上院	下院	上院	下院
法律家	50.6	60.0	87.5	68.8	78.2	68.7
医師	20	5.0	n.a.	6.4	4.3	4.1
農業家	0	22.5	20.8	32.2	21.7	30.2
教師	3.5	7.5	0.0	1.0	4.3	2.0
実業家	8.3	11.3	0.0	8.6	13.0	11.4
ジャーナリスト	0	2.5	33.3	9.6	4.3	5.2
そのほか	17.6	2.5	0.0	2.1	13.0	3.1
合計	100.0	111.3	141.6	128.7	138.8	124.7

（出所）Ocampo (2000, 8), Philippine Assembly (1908), Stauffer (1966, 580)より筆者作成²。

² 議員によっては複数の職歴を記しているため、合計は100%を超える場合がある。

植民地政界の大立者となるセルヒオ・オスメーニャとマヌエル・ケソンの経歴を見ると、植民地国家機構が二人のキャリア形成に与えた影響の大きさを思い知ることになる。1878年に、セブ州とタヤバス（現ケソン）州のそれぞれで生まれた二人は、マニラのサントトマス大学に進学、法律を修めた。フィリピン革命期、オスメーニャは郷里に戻って革命の大義を訴える新聞を発行した一方、ケソンは革命軍に加わった。比米戦争後、両者はそれぞれの出身州の検察官となり、米国植民地機構に加わるようになった（Cullinane 2003, Ch. 7 and 8）。その後、州知事を経て植民地議会議員に選出され、植民地政界の中心人物となっていった。なお、オスメーニャ家は裕福な一家として知られていたが、セルヒオが非嫡出子であったことから実の母親ともども子供時代は不遇をかこったという。セルヒオがオスメーニャ家の中心人物となるのは、彼が大学に進学して法律家になった後であった。彼の事例からは、富裕な家の中でも競争があったこと、その競争の勝敗は学問によって決まったことが分かる。他方、マニラから遠く離れたタヤバス州の教師の家に生まれたケソンの事例は、教育機会の拡大、植民地官僚機構と議会の存在が、植民地期の代表的ナショナリストを生み出した典型的な事例といえるだろう。

1907年選挙の結果、全80議席のうち58議席を国民党が獲得、連邦党から改名した進歩党は16議席を獲得したに過ぎなかった（Forbes 1928）。選挙結果から、連邦党／進歩党に結集した知識人のほとんどは政治力を失ったことがわかる。しかしながら、こうした知識人がナショナリストであることを辞めたわけではなかった。フィリピン革命以降の知識人の役割を考察したモハレスによれば、スペイン植民地期の知識人は植民地国家との衝突、米国植民地期には植民地国家における国民形成に、それぞれ活動の軸足を置いていたとする（Mojares 2006, 489）。実際、この時期には植民地政府とは別に法律学校が設立されており、米国政府が設立したフィリピン大学にとどまらない教育機会が保証された。こうした法律学校で学んだフィリピン人は、「フィリピン化」の名の下で進むフィリピン人官吏採用の流れに乗って続々と出仕していった。モハレスは、こうした官僚を学者官僚と呼び、植民地国家の枠の外にいた19世紀の知識人と区別している（Mojares 2006, 493）。また、法律学校を設立したフェリペ・カルデロンは国民形成にも主体的にかかわっており、フィリピン歴史協会を設立して、フィリピン人の歴史の創造にも関与した（Mojares 2006, 485）。

他方、米国による懐柔策は植民地民主主義の普及にとどまることなく、フィリピン人に対する教育機会はさらに拡充された（岡田 2014）。実際に、1903年にはフィリピン人教員養成のための米国留学の制度が創られ、1903年から1912年の間におよそ200名のフィリピン人が米国に留学した（Agoncillo and Alfonso 1961）。1907年には、帰国した奨学生による親睦団体であるフィリピン・コロンビアン・クラブが設立され、奨学生たちのネットワークの強化に貢献した。ただし、このクラブは単なる社交を超え、フィリピン人の権利を主張するためのプラットフォームとしての役割を担うようになっていったという（Quirino 1987, 39）。

こうした留学生や学者官僚の存在は、比較の亡霊に取りつかれた知識人の存在を裏付けるものといえる。実際、米国に留学し、植民地政府に出資した経済官僚の一部は、1930年代に台頭した第二世代の植民地政治家と協力しながら経済的脱植民地化を目指す運動を展開した (Takagi 2016, Ch. 1, 2)。この時期、上述のオスメーニャやケソンから 10 歳以上歳の離れた若手政治家であり、後に相次いで大統領となるマヌエル・ロハスやエルピディオ・キリノらはそれぞれに政治運動や組織を立ち上げた。まず、ロハスは工業化と農業の多角化による経済的脱植民地化を訴える超党派の政治運動として新カティプーナを組織した。また、キリノは、独立が間近に迫る中、上院において関税制度の改革に着手するための頭脳集団としてフィリピン経済協会を組織した。いずれも、財務省や農業省などの経済官庁に努める植民地官僚の支持を得ていた。また、彼らの多くが米国に留学していたが、そのことによって彼らが米国の統治を礼賛するようになったわけではない。むしろ、植民地フィリピンに押し付けられた自由貿易制度と、宗主国米国が採る保護主義的経済政策との間の矛盾に気づき、現状変革を志向するようになっていった。米国植民地期の学者官僚もまた、リサールのように比較の亡霊に取りつかれたといえるだろう。

おわりに

本稿は、アンダーソンの名著を手掛かりに、ナショナリズムを生み出す構造や制度について検討してきた。その過程で、植民地官僚制の整備がナショナリズムを生み出す契機となったことが確認できた。ただし、官僚制の整備を見るだけでは不十分であり、その中で生き、比較の亡霊に取りつかれた人々に注目することの重要性も明らかになった。

なお、冒頭で述べたとおり、本稿は『教養としての東南アジア史』に取り組むための頭づくりでもある。東南アジア諸国のナショナリズムについて、植民地国家と知識人の構想として捉えることがどの程度可能なのか、またそうであるなら、諸国のナショナリズムを何らかの形で類型化できるのかどうか、こうしたことを今後の課題としてみたい。

参考文献

<日本語文献>

アンダーソン、ベネディクト (白石隆・白石さや訳) 1997『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』NTT 出版。

岡田泰平 2014『「恩恵の論理」と植民地——アメリカ植民地期フィリピンの教育とその遺制——』法政大学出版会。

白石隆 2000『海の帝国——アジアをどう考えるか——』中央公論新社。

<外国語文献>

- Abinales, Patricio. N. and D. J. Amoroso, 2017. *State and Society in the Philippines*, Rev. ver. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Agoncillo, Teodoro A. 1996. *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*. Quezon City: University of the Philippines Press. First published in 1956.
- Anderson, Benedict. 1998. *The Specter of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*. London: Verso.
- Cullinane, Michael. 2003. *Ilustrado Politics: Filipino Elite Responses to American Rule, 1898–1908*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Forbes, William. C. 1928. *The Philippine Islands*. Boston: Houghton Mifflin.
- Go, Julian. 2008. *American Empire and the Politics of Meaning: Elite Political Cultures in the Philippines and Puerto Rico during U.S. Colonialism*. Durham: Duke University Press.
- Legarda, Benito. J. 1999. *After the Galleons: Foreign Trade, Economic Change and Entrepreneurship in the Nineteenth-Century Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Majul, Cesar A. 1996. *Mabini and the Philippine Revolution*. Quezon City: University of the Philippines Press. First published in 1960.
- Mojares, Resil B. 2006. *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T.H. Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Ocampo, Ambeth R. 2000. “The Malolos Congress” in Pobre, Cesar P. ed. *Philippine Legislature 100 years*. Quezon City: Philippine Historical Association with New Day Publishers
- Philippine Assembly. 1908. *First Official Directory*. Manila: Bureau of Printing.
- Quirino, Carlos. 1987. *Apo Lakay: The Bibliography of President Elpidio Quirino of the Philippines*. Manila: Total Book World.
- Richardson, Jim. 2013. *Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892-1897*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Schumacher, John N. 1991. *The Making of a Nation: Essays on Nineteenth Century Filipino Nationalism*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Stauffer, Robert B. 1966. “Philippine Legislators and their Changing Universe” *The Journal of Politics*, Vol.28, No.3, 556-597.
- Takagi, Yusuke. 2016. *Central Banking as State Building: Policymakers and their Nationalism in the Philippines, 1933-1964*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Tilly, Charles. 1992. *Coercion, Capital, and European States, AD 990-1992*. Cambridge: Blackwell.

Wickberg, E. 2000. *The Chinese in Philippine Life 1850–1898*, repr. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.